

風流たる濁世の佳公子 一詩に見える曹丕と曹植一

趙 美子

本論文は、曹丕と曹植の詩に対する歴史上の評論と近代以来の先行研究をまとめた上で、関連する資料の記載を整理しながら、曹丕・曹植詩における公宴・閨怨・遊仙という三つのジャンルを分析して論述するものである。

第一章では、曹丕と曹植の関係に関する記載や作品を時代に分けて分析した。第一節は建安時期における彼らの関係について、「文学のやり取り」と「後継者を巡る問題」という二つの方面から分析し、第二節と第三節は父の曹操の没後から漢魏交替までの延康時期と魏王朝成立後の黄初時期において、丁氏兄弟の誅殺や曹植の「罪」への処罰、また封国の転封などの問題点を巡って分析しながら、曹丕即位後における二人の関係を検討した。以上通じて、建安年間において、曹丕と曹植の関係は非常によかったが、後継者問題より、むしろ曹丕即位後に、丁儀らの刑死と曹植の罪への処罰が二人の関係にマイナスな影響を与えた。曹丕は主観的に「迫害」などをしようとする気持ちはなかったが、やむを得なくも曹植を苦しめたことは確実である。曹植は曹丕に対して不満を表したこともあるが、その不満を生み出したのは、まさに親しい感情と会いたい気持ちではないかと考えられる。ゆえに、曹丕と曹植の間に関係の起伏があったとしても、兄弟の情愛は一貫していた、という結論を出した。

第二章では、建安年間の公宴詩の中からその背景や時期が推測できるような作品を取り上げて検討した。結果としては、建安の公宴詩は集団創作の産物であるが、すべて同時期の作品とは限らず、少なくとも時期や場所の異なる四回の宴会に関して詠われたと考えられる。第一回は建安十四年十二月の譙における宴会で、関連作品は曹丕「於譙作詩」・劉楨「贈五官中郎將四首」其一と其四・應瑒「公讌詩」の四首である。第二回は建安十七年秋の銅雀台および西園における宴遊で、関連作品は曹丕「芙蓉池作」・曹植「公讌詩」・劉楨・「公讌詩」・應瑒「侍五官中郎將建章臺集詩」の四首である。第三回は建安二十一年元日の孟津における宴会で、関連作品は曹丕の「孟津詩」である。第四回は建安二十一年夏の鄴宮における宴会で、関連作品は曹丕「夏日詩」・曹植「侍太子坐詩」・王粲「公讌詩」・陳琳「宴會詩」の四首である。四回とも主催者は曹丕と思われる。

第三章では、主に黄初年間の作とされる曹植の閨怨詩について分析した。曹植閨怨詩に対して従来の読み方を検討した上で、内容から夫に棄てられた女性を詠う「棄婦詩」と、戦争などに赴いた夫と遠く離れた女性を詠う「思婦詩」の二種類に分類し、それぞれの趣旨と創作背景について分析した。これらの詩には、確かに夫婦の別れを借りて曹丕との別れを喩える傾向が見られるが、王朝の制度や地理的距離のために離れていても、曹植が詩に託した曹丕への思い、また曹丕の行動に見える曹植への配慮がずっと続いていたのも無視すべきではない。それゆえ、棄婦詩に詠われた相手の裏切りによる別れより、思婦詩に

詠われたやむを得ない別れこそが黄初年間における曹植と曹丕の関係の実態に近いと言える。

第四章では、曹植の遊仙詩、主に曹丕没後の太和年間の作と思われる三首の遊仙詩について分析した。特に鼎湖故事の多用と、ほかの作品にも見える殉死や自滅意思の表現から、曹植遊仙詩の一部には曹丕への殉死意思が捉えられるという結論を出した。曹植は若い頃から神仙の逸話や遊仙詩に対して興味を持っていたようではあるが、積極的に遊仙詩の詩作に携わり、しかも単なる神仙の逸話と長寿の祝福を綴ることから自らの思いを遊仙詩に託したのは、恐らく曹丕の死をきっかけにしたのであらうと思われる。曹植が遊仙詩の中で曹丕を黄帝に喩えるのは、彼にとって曹丕について死にそこなった自分は、まさに黄帝が昇天するとき龍に乗りそこなった黄帝の臣下たちの立場と同じからであらう。そして黄帝昇天などの神仙故事を詠うことで、兄の曹丕が行った、そしていずれ自分も行く死後の世界を、期待を抱いたように神仙世界に想像していたのであらう。それゆえ、曹植は晩年に至ると神仙を信じるようになったというより、むしろ客観的に存在するか否かに関わらず、神仙世界に憧れるようになったと考えられる。

以上を通じて、詩人としての曹丕・曹植の生涯にわたって絶えることなき絆に対する理解をより一層深め、または彼らの関係に対する叙述に新しい印象や語り方を提供することができる。